第十九卷　第一號　三六

支那歴史的思想の起源

文學博士　内藤虎次郎

近頃は私は田舍に許り引つ込んで居りまして皆さんにお目に掛る機會が少いのでありますが、今度何か支那學會の大會でお話をしろと云ふことでございますので、段々老衰を致しまして、新しく何物かを調べてお話をすると云ふやうな大儀なことは叶ひませんから、何ぞ何も新しく調べんでも宜いものが思ひ出せたらお引受けしませうと言つて居りました。其の後何かそんなものは無いかと思つて家の中を捜しました所が、今から十數年前、支那史學史を大學で講義して居つたことがありますので、其の時に多分講義をしなかつた分だらうと思ひます、後から其の筆記を訂正します時にちよつと紙二、三枚にそれだけ補ふ心算で書いて居つたものが見付かりました。もう大抵大學に居られる方もお若い方許りで年代が變つて居りますから、假令私が其の時分にこの講義をして居りましても、それをもう御承知の方は無いことと思ひます。そんな古いものでありますから一向新研究でも何でもありません。それで若しそれが講義をせずにあつた分でありますれば、尙此の際にちよつと其のお話をして置く方が私にとつても都合が宜いと思ひますので、其の部分だけは詰り私の手許に講義の筆記も何にもな

く、只ちよつと要綱のやうな一つ書きが殘つて居るだけでありますから、横着なやうでありますが、茲で筆記をして下さると云ふ話でありますから尙都合が宜いので、講義のし殘しを茲で補充をする譯であります。若しひよつとしてさう云ふ風に要綱だけでも書いてありますから何處かでお話をしてあるかも知れません。其のお話を聽いて居られる方がありましたらどうぞ勘辨願ひます。尤もお聽きになつても多分お忘れになつて居る頃と思ひます。

それで「支那歷史的思想の起源」と云ふ、何だか如何にも近頃の演題としてはひどく氣の利かない題目であります。近頃は斯う云ふ風な幼稚な題目は流行りませんで、皆凝りに凝つた題目許り流行つて居つて、題目を見ると何の內容があるのか分らんやうなのが流行りますけれども、至つて分り易い題目であります。

實は私の支那史學史と云ふものは、――抑々それを始めましたのは大正三年頃でありますから、今から十九年廿年前であります。それを訂正をして二度繰返しました。それで二度目の時でありましても十數年前で、多分大正五、六年頃から二年か三年續けてやつて居ります。其の後訂正は一通りはしてあります。大正十二年、私大病をした後に有馬に暫く居りました。其の時の筆記の訂正だけは致しましたけれども、之を出版する程の訂正するのはもう少し暇がかゝりますので、其の儘に打つちやらかして今日迄發表をしないのであります。

さう云ふ譯で隨分研究とすればもう微の生えて居る研究であります。其の時に大體此の支那の歴史の起源と云ふやうなものに就いて色々研究をして見ました。或は其の中の研究では私が先にやつたことを後に王國維氏がやつたのが、今日では王國維氏の創說のやうになつて居る部分なんぞありますが、兎も角一通り歴史の起源と云ふやうなことに就て其の時考へて見たのであります。其時講義しました歴史の起源は多くは史料の起源、記錄の起源と云ふやうなものに就てやりましたので、餘り歴史的思想の方の起源はやつて居らなかつたやうに思ひまして、それで其の部分が缺けて居ると思ひまして、後で其の要領だけを補つて其の筆記の中へ挾んで居つたと思ひます。大分老衰の加減で記憶が惡くなつて居りますから、間違つて居るかも知れません。

實は起源と申しましても、起源と云ふ方が宜いのか、或は其の歴史的思想が段々發達して居る徑路に及んで居るのでありますから、歴史的思想の發達と云ふ方が宜いかも知れません。兎も角さう云ふ方のことに就て、色々の材料に就て考へました。

第一は比較的正確な記錄の中に見えて居る歴史的思想であります。支那の古記錄、例へば經書と云ふやうなものでも、絶對に正確と云ふことを申しますのには餘程困難であります。先づ比較的正確と言ふより外致し方ありません。それで詰り尙書などが最も比較的正確な記錄であると思ひますが、其の尙書の中に又最も比較的正確な部分があると思ひます。それはどう云ふことかと申しますと、周の初

め、周公を中心として書いたものが最も比較的正確であらうと思ふのであります。今日の尙書の中の、確かだと言はれる今文尙書の中で、殊に周公に關することが比較的正確であると思ひます。其の理由迄申しますと却々長くなりますから、今日はお預りして置きます。で其の周公に關係したことと申しますと云ふと、例へば大誥、康誥、酒誥、召誥、洛誥、之を五誥と申しますが、其の五誥であるとか、或はそれに續いてあります所の無逸、君奭、多士、多方、立政、さう云ふ諸篇は皆周公に關係したものであります。それが先づ大體に於て尙書の中でも比較的正確なものだと思ひます。併し之に就て更に細かに考へて見ますと、其の中でも純粹な記錄で保存されたものと云ふものは却々無いのでありまして、一部分は記錄、一部分は傳誦で傳はつて居つたやうな形であります。其の中でも記錄として遺つた部分の多からうと思ひますのは今の五誥の種類でありまして、それに比べますと無逸とか君奭とか云ふやうなものは多少物語として遺つたかのやうに考へられる部分が多いのであります。尤もそれにしても、卽ちそれが多少物語になつて遺つて居つたとしましても、其の物語は或る新しい時代に之を簡冊に書かれたものでなくして、相當古い時代に書かれたものではないかと考へられます。それ等の周公に關係しましたものの中で最後に出て居りますのは立政篇でありますが、其の中に使つてある文字、――妙なことから私考へ付いて居りますのですが、其の中に助字の「矣」の字を使つて居ります。助字の「矣」の字を使つて居る篇は周公に關係した諸篇の中で立政一つである。さうしてそれが詩

經などの例に依りますと、「矣」の字が段々多く使はれて來て居りますのは大體西周の末頃から東周の初め頃に出來ました詩に多いやうに考へられますので、① 此の立政などは少くとも周公に關する說話が東周の初め迄の間に書かれたものではないかと思ひますので、それが詰り周公に關係した諸篇の最後に出て居りますから、それ以外のものは大體それ以前に書かれたかと、まあ想像するのでありますが、まだそれを極めてはつきりと申上げる程研究はして居りませんです。

兎も角さう云ふ次第でありまして、先づ其の中で五誥と云ふやうなものは傳來して居る支那の記錄としては最も確かなものではないかとも考へられます。もう一つ此の中で召誥、洛誥が餘程古からうと云ふ證據としては、洛誥篇の組立てが餘程妙に出來て居りまして、一篇の最後に年月を書いて居ります。洛誥篇の最後に「惟周公誕保文武受命惟七年」と書いてありますが、其の前に「在十有二月」と書いてあります。で、此の召誥、洛誥と云ふ二篇は、是は其の內容の意味は連續して居る記事でありまして、是は殆んど同時に出來たと云ふことは內容からして疑ひのないものでありますが、その洛誥の末尾に斯う云ふ紀年の書き方がしてあります。此の紀年の書き方は之を銅器の銘と比較して見ますと、銅器の銘の中でやはり最も古い書き方の所に是があるのであります。大盂鼎、小盂鼎と云ふ銅器がありまして、是は今日に遺つて居る銅器の中で最も製作も立派なもので、さうして其の銘の內容も餘程淳古なものとなつて居るのでありますが、其の銅器の紀年のし方は大盂鼎の方にはやはり最後に年を

書いて居りまして、さうして「隹(惟)王廿又三祀」とあります。それから小盂鼎の方は「隹王廿又五祀」とあります、是が最後にあります。其の外私は當時之を調べました頃に攈古錄金文などに當つて見たのでありますが、攈古錄金文に出て居ります銅器では「觶尊」、是がやはり最後に歲月が出て居りまして、是が餘程變な書き方をして居りまして、「隹王十祀有五三二日」、斯う云ふ紀年の書き方をして居ります。それからもう一つは「庚申父丁角」としてありますが、是は多分今住友家に來て居るのでないかと考へます。或は「宰椃角」とも申します。これには「十月隹王廿祀」とあります。それからやはり攈古錄金文に「戊辰彝」と云ふものがありまして、これには「在十月隹王廿祀」とあります。それからもう一つは最近の郭沫若氏の金文辭大系に出て居りますので「趩尊」、是がやはり「隹王二祀」と出て居ります。以上は皆銘文の最終に年の出て居ります例であります。

それで斯う云ふ風に篇年のあるのは大體所謂西周の銅器にだけあるのでありまして、東周以後の銅器には殆んどありません。是は餘程古い紀年の書き方と言つて宜しからうと思ふのでありますが、それと此の洛誥の紀年の書き方と一致して居りまして、洛誥には七年としてあつて、七祀としてありませんが、斯う云ふのは記錄が段々傳はつて居る間に後出の分り易い文字に書き直すことはあり得るのでありまして、例へば司馬遷の史記の中に尙書を引用した處を見ますと、色々原文の文字を變へて居ります。訓詁の字を以て代へたと云はれて居りますが、やはり古い記錄を新しく傳へる時は分り易く

して置く必要がある所から、斯う云ふ風に文字を書き直すことはあり得ることであります。

兎も角此の召誥、洛誥が尙書の中で記錄された時代が最も古いもの、確かなものと言つて宜からうと思ふのでありますが、處で今の召誥の中に此の歴史的思想と云ふやうなものが餘程はつきりと現れて居ります。大體支那の歴代は最も古い時代に夏が代つて殷となり、殷が代つて周になつたと申しますが、夏が代つて殷になつた時の其の確かな記錄と云ふものは今日では判りませんので、尙書の中にある殷の湯が夏を征伐した時の湯誓湯誥と云ふ誓誥の類はありますけれども、是等は大體物語で傳はつて居つたのが或る時代に記錄に書き入れられたらしく思はれますので、全く初めから記錄で保存されて居つたとは考へられませんのです。それのみならず其の夏以前に一體支那はどれだけの歴代があつたか知りませんけれども、兎も角夏が殷になり、殷が周になると云ふことは支那では餘程古代史上の大事件であつたのでありませうが、夏が殷になつたと云ふやうなあゝ云ふ一つの朝廷が一つの朝廷に代つただけではまだ歴史と云ふものの考へがさう著しく現れて來ないと思ふ。それでもう二つも代つて來ますと云ふと、そこに王朝の變化と云ふものが餘程痛切に一般の人に考へられることになるものと見えまして、支那で此の夏殷周と云ふ三代に就ては色々の點から考へられて居ります。後になつてはそれに三統說と云ふやうなものをつけまして、さうして各々其の時代の特色を云ひ現したりなんかします。兎も角三代と云ふものが出たので、それで色々其の間の變り目に就て人類の知識に大變な

衝動を與へたものと考へられます。それで此の召誥の中には此の夏殷周三代の革命に對することが現れて居りますです。それで夏が天命を失つたので殷になり、殷が失つたので周になつて來たと云ふので、それで

我不可不監于有夏亦不可不監于有殷

と云ふ言葉が出て來て居ります。[2] 前代のことに就てそれを手本とし、或は戒めとして考へる上に就て、此の三代がだん〳〵に代つたと云ふことが古代の思想上重大なことであつたらしく思はれます。召誥の外に同じやうな考へは多士篇にも現れて居ります。[3] それから全體の革命の上の考へではありませんけれども、無逸とか君奭とかの諸篇の中にも皆歴史的思想と云ふべきものは多少現れて來て居りまして、それから多方、前にも申しました立政の諸篇に迄ます〳〵それが現れて居ります。一つは是は今日尚書を讀んで見ますと云ふと、勝利者である所の周が、失敗者であると言つてもまだ非常な實力を有つて居つた殷人に對して、お前の國の殷も前代の夏が政が衰へたが爲に取つて代つたのでないか、お前の國が天命を失ふと吾が國が天命を得てそれに代ると云ふことが當り前のことだ、と云ふ風に因果を含めて聞かす爲の當時の政策とも見えますけれども、兎も角さう云ふ風に三代變化があつたと云ふことは、それは歴史的思想としては當時餘程重要なことであつたらうと思ひます。それが先づ一つ比較的正確な古い記錄の上に現れる所の歴史的思想であります。

それから第二に於きましては、古代に於て此の支那の國土を開いた人から、段々その時代迄世の中の變化、王朝の變化と云ふことを考へる思想が現れて來て居ると思ひます。それで古代に於て國土の開闢者として詩經若しくは書經の中に先づ出て來るのは夏の禹であります。夏の禹に關することは經書の中にも隨分澤山出て居りますが、詩經の大雅の蕩の篇に、是は有名な誰でも知つて居ることで

殷鑒不遠在夏后之世。

と言ふ言葉が出て居ります。是は僅かに二句にして三代の移り變りを言ひ現して居るのであります。それから大雅の文王有聲の篇に

豐水東注。維禹之績。

と云ふ言葉が出て居る。詰り禹が水土を平げたと云ふことの考へは此の頃現れて居るのであります。又大雅の韓奕の篇に

奕奕梁山。維禹甸之。

斯う云ふことが現れて居ります。それから其の外にも魯頌には　奄有下土。纘禹之緒。とあり、商頌の長發篇には　洪水芒々。禹敷下土方外。とあり、同じく商頌の殷武篇には　天命多辟。設都于禹之績。とありまして、皆此の禹に關したことが現はれて居ります。斯う云ふ詩が一體何時の頃に作られたか、それが判るのも判らないのもありますけれども、殊に商頌などの作られた時代は餘程はつきり致しま

せんのでありますけれども、今此の中で一番作られた時代の判るのは魯頌でありませう。是は主に魯の僖公のことを言つてありますから、それで僖公以後に作られたことは確かでありまして、④中には作者の名まで傳へられて居る位であります。さうしますと是等の禹の說話は魯頌以後に作られたのではないと言つて宜からうと思ひます、少くとも魯頌の出來る頃以前のものでありませう。その他の大雅の二篇もやはり少くとも西周の末頃から東周の初めの間に出來た詩篇であります。又尙書の中で禹のことを申して居りますのは虞夏書である所の堯、舜、禹のことを特別に書いた部分、それから又洪範などの如くやはり禹から傳へられたと云ふことだけ特別に書いたものは別としまして、周人の言葉で禹に關係したものと申しますと、やはり先程申しました立政篇に斯う云ふ文句があります。

陟禹之迹

此の文句は大體詩經の中にある文句と餘程よく似て居ります。此の「迹」の字が詩經の方は「績」の字になつて居りますけれども、ひよつとすると斯う云ふのは昔同じ音の字であつたので同じ意味であつたのではないかと思ひます。さう云ふことは又魯頌の中にある禹に關する

纘禹之緒

と云ふ文句がありますですが、是が金文の有名な「齊侯鎛」と申します鐘の銘の中には

咸有九州。處禹之堵。

斯う出て居ります。是等は「堵」の字と「緒」の字は本來は同じ字であつたらうかと思ふのであります。さうしますと、詰り此の禹が水土を開いたと云ふ傳說の盛んに世の中に現れて來たのは西周の末から東周の初め頃であらうと考へられます。さうすれば商頌にしても其の作られた時代を此の頃と見る說の方が確からしくなるのであります。

それからして今申しました「齊侯鎛」の中に金文として禹の事が現れて居ります。此の「齊侯鎛」と云ふ鐘は古く宋の時の博古圖にも出て居ります。それから南宋の薛尙功の鐘鼎欵識にも出て居りまして、之に關する研究は近代になりましてから孫詒讓が「古籀拾遺」でやつたのが最も精確とされて居ります。此の中に殷の湯が伊尹の相けに依つて夏の桀を討つて、さうして九州をことゞく有して禹の居つた土地に居つたと云ふことが出て居ります。前文に引きましたのは其中の二句であります。是が金文で、夏殷間の革命を叙述したものであります。此の「齊侯鎛鐘」と云ふものは大體に於て魯の成公時代のものと云ふことになつて居りまして、是は其の中に書いてあります齊侯といふのは齊の靈公であるので、其時代が分るのであります。卽ち春秋の中頃であつて、大體東周の初めの方の時代に當るのでありますから、魯頌などと大した相違のない時代に出來た金文だといふことになります。是は今日其の銅器の實物は傳はつて居りませんけれども、それと同時に作られたらしいやはり「齊侯鎛」の一種が今日でも支那に傳はつて、蘇州の潘氏、潘祖蔭の家にあると謂はれて居りますので大體是は確かな

ものに違ひないのでありますが、その中に此の禹の說話を書いて居りまして、それから以後の殷、周の革命に及んで居りますから、是等は禹を開闢者とした歷史思想の餘程確かに現れたものであると言つて宜しからうと思ひます。尤も此の禹の傳說は、商の玄鳥墮卵の話、周の姜嫄が巨人の足跡を履むなどの如き原始的トーテミズム的の說話とは異なつて、本來は一種のトーテムであつたとしても、全體の國土開闢者として考へられるまで發達した點は、已に歷史的思想によつて構成されつゝあることを示す者であります。

第三は、私は之を「緣起譚」と申して居りますが、緣起譚に現れる所の歷史思想であります。此の緣起譚と云ふものは何處の國でも古い歷史、物語、記錄には皆あるのでありまして、日本などでも日本紀や何かの古い歷史には緣起譚が非常に多いのです。殊に「風土記」と云ふやうなものは全部緣起譚で出來て居ると言つて宜しいのでありますが、此の日本紀などの緣起譚にはよく其の事實を書きまして、是は世の人が斯う云ふ風に傳へて居る「緣（ことのもと）なり」と云ふことをよく言つて居ります。例へば日本紀の神代の所に天稚彥のことを書きました所に

此れ世の人の所謂反矢（かへしや）畏むべしと云ふ緣（ことのもと）なり

と書いてあります。それから伊弉諾、伊弉冊命の所でありましたか

世の人生（いける）を以て死（まかれるひと）に誤つことを惡む、此れ其の緣（ことのもと）なり

と書いてあります。さう云ふことは日本紀に隨分澤山あります。神武天皇紀でも其の機密を人に言ひ渡す爲に倒語を使つたと云ふことがありまして、倒語を用ゐることは始めて茲に作れりと云ふやうなことを書いてあります。それから此の日本紀の記事の多くは色々な家柄のことを書きました時に、其の家柄の大抵先祖を書くか、或は墓を書くか、それから又古い人のことを書いて今日の何と云ふ家は其の苗裔だと書くか、何か皆今日現在して居ることから遡つて其の因緣を尋ねる話になつて居ります。それが卽ち緣起譚でありますが、此の緣起譚は支那の古書でも左傳などの中に隨分澤山あります。左傳許りでありません、春秋には其の外の公羊傳などにも出て居りますが、それに就て宋の王應麟は困學紀聞に於て其のことを注意して居ります。困學紀聞の最終の雜識と申します篇に其のことを澤山擧げて居りまして、是は主に禮記とそれから左傳とに據つて書いたのでありますけれども、左傳に「始」と云ふ文字を用ゐてあるのは必ず何か新しき事柄の始まつた時のことを現してあるので、それで「始」と云ふことが大切なんで、「始」と云ふことが皆必ず書いてある。例へば隱公の五年に此の祀りをする時の音樂に六佾を用ゐたと云ふ時に「始用六佾也」と書いてある。斯う云ふ風に始めて何すると云ふことは澤山左傳に出て居るが、それは皆「始」と云ふことが第一大切で、物の變化と云ふことの是が證據になるから、そこで此の「始」と云ふ字を書いてあるのだと云ふことを困學紀聞の卷の二十に書いて居ります。左傳のみならず禮記の中に其のことが澤山あることを先づ書いて居りまして、禮記は禮の變化

に於て皆「始」と云ふやうな言葉を書きまして、さうして其の次にずつと擧げて居りますが、主に禮記の檀弓、曾子問、玉藻、雜記、郊特牲、さう云ふ諸篇の中に總て禮の變化に就て「何のことを何々より始まつた」と云ふ風に皆書いてありますので、一番眞つ先は檀弓に

孔子之不喪出母。自子思始也。

と云ふことがありまして、それ等をずつと皆擧げて居ります。是は勿論王應麟が始めて氣が付いたのでなくして、宋の陸佃が氣が付いたのを王應麟がそれを補つたと云ふことでありますが、兎も角禮の變化と云ふことに就て「始」と云ふことを書いてあるのが王應麟、其の他の人によつて注意されました。[5] それで王應麟は其の外にも困學紀聞の卷の五に「禮記の曾子問篇は變禮に於て講ぜざることなし」と云ふことを云つて居ります。それから又困學紀聞の卷の六に先程申しましたやはり六佾を用ゐたことでありますけれども、茲は公羊傳を主として書いたやうでありますが、兎も角其の六羽を献ずると云ふことゝ、それから此の「稅畝」と云ふことがありますので、此の畝に稅すると云ふことの起源に皆「始」と云ふ字を書いてあると云ふことを書いてありまして、それで此の「始」と云ふことがやはり此の世の中の事柄の變化する大事なことであると云ふことに注意しましたのです。[6] 其の外にもう一つ王應麟の注意しましたことは――前のは「始」でありますが、今度はもう一つ「猶」と云ふことを注意しました。[7] それはやはり左傳の閔公の元年の時に魯の國が「猶秉周禮」と云ふことを書いた所があります。そ

れから僖公の二十三年の時に「齊猶有禮」と云ふことを書いてあります。之に就て王應麟は、茲に猶と云ふ一字を使つて居る所を見ると云ふと、大體に於て禮は久しく廢つて居つたのであるが、僅かに魯なり齊なりに猶其の禮が遺つて居つたと云ふ意味であると云ふことを言つて居ります。是等もやはり世の中が變つて居るのに茲に猶遺つて居ると云ふ意味で、「始」と云ふのはこれから段々始まつて、其のことが段々後になつて盛んに行はれるやうになることであります。是等が詰り緣起譚として、何か其の當時あることの因、或は古くから傳はつて居ることの變つて來ること、是が緣起譚的歴史的思想であります。斯う云ふことから前代のことゝ今代のこととを比較するやうになつて、其の變り目を考へて歴史と云ふものに關する考へが起るのであります。それがやはり歴史思想の一つの重大な起源であると思ひます。殊に是は日本紀のやうなもので考へて見ますと云ふと、日本紀の大部分はさう云ふ緣起譚でありますから、それでそれが幸ひに公羊傳なり左傳なりの中にやはり緣起譚的のものが遺つて居る所は、之によりて支那の古代史の體裁、古代史の考へも分るやうになると思ひます。是が一つであります。

其の外に支那の學者で左傳のことを研究しました汪中なども注意して居つたのでありますが、左傳に記す所は人事のみでなく、天道、鬼神、災祥、卜筮、夢の五つであるとして、一々其例を擧げて居りますが、其中で歴史的思想に關係することは主に災祥、卜筮、夢の三つであります。[8] 是は隨分色々歴史的

思想の發生に關係すると思ひます。はつきり分りよいのが卜筮でありますが、左傳國語の卜筮に關したことは、日本でも卜法の上から注意した人がありまして谷川龍山といふ人が「左國易一家言」と云ふ本を作つた位であり、それに左傳、國語の卜筮に關した記事が大方載つて居ります。それを見ても分ります通り大體此の卜筮に關する記事と云ふものは大抵皆――勿論的つた八卦許り載つて居るに違ひないので、的らない八卦は大抵載つて居ないのです。恐らく是は其の卜筮家の記錄が根本だらうと思ひます。卜筮家としては自分の家の職務で卜つたけれども、的らなかつたと云ふことを書く必要はない。皆的つたことを書くと自分の家の職務としては輝きます、さう云ふことから勿論的つた八卦を書くに違ひありません。其のことは汪中も注意して　史之於禍福。舉其已驗者也。といつて居ります。四庫全書提要には、左傳載預斷禍福。無不徵驗蓋不免從後傳合之。とまで申して居りますが、それを日本の安井息軒先生のやうにもつと眞面目に考へると云ふと、それが道德的に戒勸とするに足る正しいことだけ書いてあるやうに考へられますけれども、提要の作者や汪中はもつと皮肉に見ましてやはり的つた八卦だけが現れて居るのだと云ふことを注意して居ります。最も其の中で大きな的つた八卦で世の中の問題になつて居るものがあります。それが或は此の左傳其のものの本の値打如何、眞僞如何に關係する問題に迄なつて居るものでありまして、支那でも七百年前の朱子などは却々さう云ふことに對して隅に置けない皮肉屋でありまして、面白い批評をして居るのでありますが、此の重大な關係と申

しますのは一つは齊の國の田氏の事であつて、齊の國を奪つて取りますが、此の田氏の先祖と云ふものは陳敬仲と云ふ人が陳の國から行つて齊の國に仕へたので、其の末孫が大變盛んになつてさうして到頭齊の國を奪つたと云ふことであります。其の陳敬仲が始めて齊の國へ行つて仕へた所、それが卽ち左傳魯の莊公の二十二年の所に出て居つて、そこに占が出て居りますが、段々其の家が盛んになつて八代の後になつたならばこれより大きな家がなくなるだらう、と云ふやうなことを書いて居りますが、それに對して朱子はハヽア是は詰り八代の後になつて其の家が大きくなつた所を見てから書いた、是は後から前の占のことを書いたので――朱子は左傳と云ふものは多くは後來の人が書いたのだ――それで後に盛んになつた家のことを見てから、其の家が始めて興つた時のことを遡つて書くから、それで旨い的つた八卦が書けたと云ふことを言つて居ります。さうしますと齊の國が田氏に變つたと云ふのは、戰國の初めになるのでありますから、其の頃のことを知つた人が左傳を書いたのだと云ふことになるので、左傳の記錄された時代の一つの證據と云ふものになり得るのであります。

又晉の國は後に韓、魏、趙の三家が奪ひまして、さうして小國になつたのでありますが、其の魏の國の最初の人に畢萬と云ふ人が晉に用ゐられる時のやはり占がある。此の畢萬と云ふのが魏と云ふ土地に封ぜられた。魏と云ふのは大きい、萬と云ふことがものの數の極度であるから、此の家が繁昌す

るだらうと云ふことに占つて居る。此の占は朱子などの考へではやはり是は魏の國が盛んになつて、韓趙と三家で晉國を分けてしまつた時に書かれた、斯う考へた。さうしますと魏の國の盛んとなつたと申しますと、魏の文侯、武侯、梁の惠王の頃のことでありますから、其の頃になつて左傳が書かれた、斯う云ふ風に朱子は考へたのでありますが、王應麟も之を朱子の語類に據つて困學紀聞の中に書いて居りまして、王應麟は朱子程に極端には考へないで、是等の後からの記事は左傳の舊文でない、もと左傳になかつたのを後の人が入れたのだと云ふ風に考へて居ります。[9] 併し左傳の成立の上に就ての問題は暫く措きまして、子孫が繁昌して居る所から其の起源に遡つて、さうして其の起源に關する記事から書き起すと云ふやうな考へと云ふものは、是が隨分重大な歴史的思想だと思ひます。

日本の神皇正統記などを見まして、或は其の前のものにもありませうが、藤原家と云ふものは昔、其の先祖天兒屋根命が天照大神を輔け奉つた關係から末々までも藤原家と云ふものが繁昌して、さうして歴代攝政關白の家になるのだと云ふやうな思想を皆含んで居ります。さう云ふことはやはり藤原家繁昌の後に出來た思想であつて、其の時代思想から遡つて古代のこと迄書かれるやうになつたものと考へますが、さう云ふ思想が支那に於ては主として卜筮に關して見られて來て居りまして、一種の歴史的思想となつたのであります。

それから夢、災祥と云ふことでもやはり同じことであります。災祥と云ふのは大體は尚書の洪範に

休　徵
咎　徵

と云ふものがありまして、休いことの徵、惡いことの徵と云ふものが現れて來て、さうして其の結果が出て來ると云ふことで、洪範の五行傳などはさう云ふ意味から全部出來上つたものでありますが、洪範五行傳などの五行思想は極めて何か荒唐不稽なやうなことでありますけれども、其の間に天象時令と人事と關係して何かの原因があると其の結果が現れて來ると云ふことの意味が含んで居りますので、是が卽ち因果思想卽ち古代の歴史思想の大變重大なことであると思ひます。

是等のことはどちらかと申しますと云ふと、儒敎の方では孔子の時代、或はそれ以後、段々さう云ふ考へが薄らいで居つたやうで、孔子などは隨分さう云ふ古代思想に對しては明白な謀反氣を出して居られるやうですが、墨子などには餘程此の古代思想が純粹に遺つて居りまして、墨子の書には隨分斯う云ふ奇怪な思想、卽ち鬼神などが現れるといふやうな思想をもまだ持つて居つた。墨子の明鬼篇の中にはさう云ふことが出て居りますから、隨分此の思想は春秋以後迄も相當皆信ぜられて居つたものと見えます。それが一方から云ふと、一種の歴史思想であります。さうして春秋三傳から申しますと、さう云ふ思想は最も多く左傳の方に含んで居りますので、公羊傳などには左傳程さう云ふ思想がありません。それで朱子などが公羊は經學であつて、左傳は史學だと申して居りますのも、さう云ふ一種

の因果思想を多分に左傳が持つて居る所からさう云ふ風に考へられるかも知れんと思ふのであります。それで尤も公羊傳には又もつと別な歴史思想を持つて居ります。それは又後で申しますが、大體卜筮、夢、災祥と云ふものは緣起譚と少し似たやうな事柄でありますけれども、又緣起譚とは一種違つた思想でありまして、まあ宗教的緣起譚とも言ふべきものであります。

其の次になりますと今度は是等の原始的歴史思想がもつと洗錬されて、綜合的史學思想と言つても宜いやうなものが出來て來るのであります。それは孟子に於きましては滕の文公の篇に「孟子好辯」と云ふ章がありまして、其の中に一治一亂と云ふことが盛んに論せられて居ります。昔から世の中は一治一亂であつて、堯舜以來段々國が一時大變治まると云ふと其の次に又亂れる時が出て來る。それから又亂れて後治める人が出て來て又一治が出て來る。又一亂が出て來ると云ふことで、一治一亂を繰り返すと云ふことを孟子が論じて居ります。此の一治一亂は是は餘程古代からのことを大きく綜合した所の歴史的思想でありまして、こゝ等になると云ふと、後世の立派な史學の歴史思想と大した差がなくなつて來て居ります。大體私は孟子と公羊傳と云ふものは餘程關係のあるものと思つて居りますので、屢々同じやうな主義を述べて居る。例へば孔子が春秋を作つたと云ふことに就ての考へ、それに對する議論と云ふものは孟子と公羊傳と殆んど其の文句迄相類似したことが載つて居ります。[10] それから前に申しました畝に稅することに關する公羊傳の論に十分の一と云ふものは理想的租稅であつ

て、十が一より重いものは大桀、小桀、十が一より輕いものを大貉、小貉と云ふことを言つて居りますが、それは孟子と大體に於て同じことを云つて居ります。[11] さう云ふ點はどつちが――孟子が原ですか、公羊傳が原ですか、そこは判りませんが、兎も角それは大した時代の相違がないものと考へられまして、詰りは同じやうな思想を此の二つは持つて居つたものと考へられます。尤も公羊傳には又もつと獨特の歴史思想があります。それが三世――佛敎の三世ではありませんが――公羊傳の三世思想でありまして、「所見異辭、所聞異辭、所傳聞異辭」と云ふことがありまして、それに由つて春秋の時代を三つに分けて、亂世からして段々升平の世、泰平の世と進んで行くと云ふ思想があります。是は立派な一種の理想的な歴史思想であります。斯う云ふのは後になつて出て來た所の綜合的歴史思想でありますが、公羊傳の中には隨分讖卽ち豫言に關する考へも載つて居りまして、それで春秋の出來た由來を一つの豫言と見る考へもあるのでありますけれども、一方にはさう云ふ宗敎的な考へがあるかと思ひますと云ふと、一方には理想的に非常に進んだ歴史思想を有つて居ります。今申す三世思想などが其の最も進んだ歴史的思想であります。

斯う云ふ風に考へますと、支那の歴史的思想の起源、それからして段々發達して來た迹と云ふものは第一實際の事實に於て三代と云ふ王朝の變り目を感じたこと、それから禹が水土を平げて其の上に國を創つて以來、三代の變化があつたと云ふことの考へが行はれて居ること。それから社會的なことゝ

致しましては、禮俗の變化、宗教的な考へとしては災祥、卜筮、夢の人事との因界關係、さう云ふ風な色々な思想が根源になりまして、それから最後に綜合的な史學思想卽ち孟子の一治一亂、公羊の三世と云ふやうな思想に發達をして來たと云ふことになるだらうと思ひます。勿論それ等の歷史思想と、それに出て來る所の事實とを綜合して、さうして立派な歷史を作り上げたのは、それは漢の時代の司馬遷でありまして、十二諸侯年表の序の賛に、自分の歷史を作つた所の由來を述べて居りますので、これに古來の歷史の思想なり、材料なりを蒐める方法を言つてあります。それ迄の經路は、今申したやうな譯ではないかと思ひます。今日幸ひに茲で講演をさせて戴きますので、其のことを申して見ました次第であります。（完）

附註

① 詩の諸篇中、矣の助字ある物は左の如し。

周南　卷耳　漢廣

召南　何彼襛

邶風　綠衣　雄雉　谷風

鄘風　桑中　定之方中

衞風

氓　有狐

王風

中谷

魏風

園有桃

唐風

山有樞

陳風

墓門

小雅

常棣　伐木　天保　采薇　出車　魚麗　六月　沔水　斯干　無羊　節南山

正月　十月之交　小弁　巧言　蓼莪　小明　楚茨　瞻彼洛矣　裳裳者華　采菽　都人士

隰桑　漸漸之石　苕之華

大雅

緜　皇矣　生民　卷阿　瞻卬　召旻

②

尙書召誥篇に云く

王其疾敬德。相古先民有夏。天迪從子保。面稽天若。今時既墜厥命。今相有殷。天迪格保。面稽天若。今時既墜厥命。今冲子嗣。則無遺壽考。曰其稽我古人之德。矧曰其有能稽謀自天。

王敬作所不可不敬德。我不可不監于有夏。亦不可不監于有殷。我不敢知。曰有夏服天命。惟有歴年。我不敢知。曰不其延。

惟不敬厥德。乃早墜厥命。我不敢知。曰有殷受天命。惟有歷年。我不敢知。曰不其延。惟不敬厥德。乃早墜厥命。今王嗣受厥命。我亦惟茲二國命。嗣若功。

上下勤恤。其曰。我受天命。丕若有夏歷年。式勿替有殷歷年。

③ 尙書多士篇に云く

我聞曰。上帝引逸。有夏不適逸。則惟帝降格。嚮于時夏。弗克庸帝。大淫泆有辭。惟時天罔念聞。厥惟廢元命。降致罰。乃命爾先祖成湯革夏。俊民甸四方。自成湯至于帝乙。罔不明德恤祀。亦惟天丕建保乂有殷。殷王亦罔敢失帝。罔不配天其澤。在今後嗣王誕罔顯于天。矧曰其有聽念于先王勤家。誕淫厥泆。罔顧于天顯民祇。惟時上帝不保。降若茲大喪。惟天不界。不明厥德。凡四方小大邦喪。罔非有辭于罰。

惟爾知惟殷先人。有冊有典。殷革夏命。今爾又曰。夏迪簡在王庭。有服在百僚。予一人惟聽用德肆予敢求爾于天邑商。予惟率肆矜爾。非予罪。時惟天命

④ 毛詩魯頌に云く

駉頌僖公也。僖公能遵伯禽之法。儉以足用。寬以愛民。務農重穀。牧于坰野。魯人尊之。於是季孫行父請命于周。而史克作是頌。

⑤ 困學紀聞卷二十、雜識篇に云く

禮記於禮之變皆曰始。孔氏之不喪出母。自子思始也。士之有誄。曰此始也。郯斐復之以矢。蓋自戰於升陘始也。普婦人之髮而弔也。自敗於臺駘始也。惟殯非古也。自敬姜之哭穆伯始也。（以上檀弓篇）廟有二主。自桓公始也。喪慈母自魯昭公始也。下殤用棺。自史佚始也。（以上曾子問篇）庭燎之百。由齊桓公始也。大夫之奏肆夏。由趙父子始也。大夫弒而君殺之。義也。由三桓始也。公廟之設於私家非禮也。由三桓始也。（以上郊特牲篇）玄冠紫緌。自魯桓公始也。朝服之縞也。自季康子始也。（以上玉藻篇）夫人之不命於夫子。自魯昭公始也。宦於大夫者爲之服也。自管仲始也。（以上雜記篇）左氏傳。始用六佾。隱五年晉於是始墨。僖三十三年始厚葬。成二年始用殉。成二年魯於是乎始髮。襄四年魏絳於是乎始有金石之樂。襄十一年始用人于亳

社。昭十年魯於是始尙羔。定八年亦記禮之始變也。

尙ほ困學紀聞は翁元圻注本によりて看るを便とすべし。

⑥ 困學紀聞卷六に云く

禮樂自天子出。而獻六羽焉。非天子不制度。而稅畝焉。皆書曰初。

と。之に就ては公羊傳の隱公五年初獻六羽の條及び左傳の宣德十五年初稅畝の條を參攷すべし。

⑦ 同書同卷に云く

猶秉周禮。閔元年齊猶有禮。僖三十年觀猶之一字。則禮廢久矣。

と之に就ては左傳の上に揭げたる年の紀事を參照すべし。

⑧ 述學內篇卷二、左氏春秋釋疑の文を參照すべし。

⑨ 朱子語類卷八十三に云く

問。左傳載卜筮。有能先知數世後事。有此理否。曰此恐不然。只當時子孫欲借竊。故爲此以欺上罔下爾。如漢高帝蛇。也只是脫空。陳勝王凡六月。便只是他做不成。故人以爲非。高帝做得成。故人以爲符瑞

又云く

左傳是後來人做。爲見陳氏有齊。所以言八世之後。莫之與京。見三家分晉。所以言公侯子孫。必復其始。以三傳言之。左氏是史學。公穀是經學。

困學紀聞卷六に云く

八世之後。莫之與京。莊二十二年其田氏篡齊之後之言乎。公侯子孫。必復其始。閔元年其三卿分晉之後之言乎。其處者爲劉氏。文十三年其漢儒欲立左氏者所附益乎。皆非左氏之舊也。

⑩ 孟子離婁章句下、王者迹熄而詩亡の章、及び公羊傳昭公十二年の條を參看すべし。

⑪ 公羊傳宣公十五年、初稅畝の條、孟子告子章句下、白圭曰吾欲二十而取一何如の章を參看すべし。